● 読書感想文コンクール　中学生の部 ●

優秀賞

古屋　麻緒（ふるや　まお）　楢原中 2 年生

作品名：一日一日を精一杯生きる

図書：この川のむこうに君がいる

東日本大震災では、多くの命が失われ、大きな被害が出て、多くの人々が、経験したことのない恐ろしい思いをしたと思います。震災にあわれた人々はどれほどの苦しみを味わったのか、私には想像できません。その苦しみを背負った高校生「梨乃」がこの本の主人公です。

梨乃は東日本大震災にあい、中学から埼玉の学校に通いました。中学時代は「被災者」という特別な扱いをされていてとても辛く感じていました。そして、誰も「被災者」の自分を知らない高校に進学しました。そこで、「遼」という自分と同じ「被災者」に出会います。遼は、梨乃とは違い、被災者であることを隠さず明るく生きていました。そんな遼を梨乃は理解できず、初めは、避けていましたが、やがて自分の気持ちを素直に伝えることのできる唯一の友達が遼になります。

震災にあい、転校してきた梨乃の気持ちはとても辛く、複雑だったと思います。梨乃の周りの友達のさりげない言葉に、自分が特別視されているように感じてしまったのではないかと思います。おそらく、友達は、気をつかって接しているのですが、梨乃は距離感があるように受け止めてしまったのだと思います。

この本を読んで、一番考えさせられたのは相手の気持ちを考え、行動することの難しさです。被災者の人に対して思いやりと思っていることが、その人にとっては、触れてほしくないことだったりするのは、とても難しいことだと思いました。

梨乃の母親は、息子を失った喪失感に長い間、苦しみます。その母親の姿に梨乃も苦しみます。母親の気持ちもわかりますが、娘自身が新たな学校生活などで、辛さを感じているのに、少し梨乃が可哀想でした。一番寄り添っていてほしい母親が、娘の苦しみを大きくしてしまっているようで、私には、納得がいきませんでした。息子を失うことの苦しみは、どうにもならないことはよくわかりますが、今を生きている娘のことも気にかけてほしいと、子供の立場から強く思いました。

そして、梨乃は中学校にいた子とは別の高校に行きました。震災にあった被災者

ということは、悪いことではないので、隠しておく必要はありませんが、被災者と知られたくない梨乃の気持ちに共感しました。
　高校で吹奏楽部に入り、同じように震災にあった遼という男の子に出会いました。遼は震災のことを友達に、軽く語っているようで、梨乃は遼のことがあまり好きではありませんでした。きっと、梨乃は震災のことを重く受け止めていて、自分からあえて言う勇気がなく、遼のことを軽蔑していたのかもしれません。しかし、二人で震災のことを話す機会が増えていき、梨乃の気持ちも変わっていきました。遼は、みんなの前では明るく語っていますが、心の中では重く受け止めていることがわかったからです。きっと震災にあった者同士しか、わかりあえない何かがあったのではないかと、私は思いました。本の中で遼が「おれなんかより、大変な目にあった人は、いくらでもいるんだ。」という言葉に、私は改めて計り知れない被災者たちの、大変な思いを感じました。
　私はこの本を読むまで「被災者」という大きなくくりで考えていましたが、家も家族も失った人、家族の誰かを失った人、家を失った人、友人を失った人など、十人いれば、十の体験があり、それぞれに違った苦しみを背負って生きているのだと改めて思いました。そして、同じ被災地に住みながら、たまたま家も家族も無事だった人も、素直に喜べない現状があるのだということも驚きでした。そして、被災地で暮らしている人と、その土地を離れて暮らす人の価値観のずれが、大きくなってしまうということに、少し寂しさを感じました。また、テレビやドラマでもありましたが、津波の映像を目にしたり、サイレンの音を聞いたり、三月十一日の日などに、胸が苦しくなり、動悸が激しくなってしまったり、震えが止まらなくなったりなど当時のことがよみがえってきて、今なお辛い思いを抱えて生活をしている人がたくさんいることに改めて気付かされました。
　東日本大震災後にも、世界の各地で地震や洪水など様々な自然災害が発生して、多くの人々が命を失っています。この本を読んで、今の自分にできること、それは、生きていることに感謝して、一日一日を大切にして、精一杯がんばることだと思いました。悩んだり、不満を感じたり、やる気が出ない時は、今の幸せをもう一度認識して、前を向いて歩いていこうと思います。